

「エール・カンナー」(אֵל קָנָא)のイメージとダイナミズム

—神のねたみに基礎づけられた熱愛—

ベ・レーシート

●使徒パウロが「神の恵みの福音」とともに、余すところなく宣べ伝えた「御国の福音」はメシアによって実現する地上の王国(千年王国)についてです。「千年王国」とは、約束された王なるメシアによって実現される神の平和の王国、すなわち「マルフォト・シャーローム」(מַלְהוּת שְׁלוֹם)です。それは天と地の基が置かれる前からあった神のご計画、みこころ、御旨、目的の完成そのものです。その実現へと至らせる神のモチベーションこそ、「キヌアー」(קִנְיָא)というヘブル語の概念です。その語彙に内包されている「神のねたみ」と「神の熱意」、この二つの意味を同時に合わせ持つ「キヌアー」を一語で訳し得ないところに、ヘブル語こそが神のことばの概念を正しく伝えるべく神の選ばれた言語だと確証させられるのです。

●日本の牧師であり、神学者であった北森嘉蔵師(1916~1998年)は、エレミヤ書 31 章 20 節にある「痛み」とも「愛」とも訳せる「ハーマー」(הַמָּה)の語彙にこだわり、その語義研究とともに、エレミヤ書 31 章にある「新しい契約」との結びつきを通して「神の痛みの神学」を生み出しました。その神学の内実を、北森師は「神の痛みに基礎づけられし愛」というフレーズで表現し、「ハーマー」(הַמָּה)という語彙を神の恩寵の極みとして位置づけました。今回、私のヘブル・ミドゥラーシュのタイトルは『「エール・カンナー」(אֵל קָנָא)のイメージとそのダイナミズム』ですが、その副題を「神のねたみに基礎づけられた熱愛」としたのは、恐れ多くも、北森師の「神の痛みの神学」に通じるものを何かしら感じたからにほかなりません。

●「ねたみの神」と「熱意の神」の意味を同時に合わせ持つ「エール・カンナー」(אֵל קָנָא)の聖書的概念を正しく理解する必要があります。なぜなら、これこそが神のご計画を実現させていくモチベーションとなっていると考えられるからです。神には天と地の基が置かれる前から、あらかじめ定まったご計画(みこころ、御旨、目的)があります(エペソ 1:3~14)。神はそのご計画に従って、「やみの中から光を照り輝かせ」ました。それが創世記 1 章 3 節にある「光」(「オール」אוֹר)です。その「光」は、天地創造の前からあった「神の知恵」(「ホフマー」חֹכְמָה)と言われる先在者、永遠のかかわりの重さを意味する「神の栄光」(「カーヴォード」כְבוֹד)と密接な関係を持っていますが、今回はこれらに加えて、神のご計画を実現に至らせるモチベーションとしての「神のねたみ、神の熱意」(「キヌアー」קִנְיָא)について考えてみたいと思います。



●名詞「キヌアー」(קִנְיָא)は、動詞の「カーナー」(קָנָא)に由来します。形容詞は「カンナー」(קָנָא)で、「ねたむ神」「熱情の神」(「エール・カンナー」אֵל קָנָא)と表記されます。使用頻度数は以下の通りです。

- ①名詞「キヌアー」(קִנְיָא)は43回。熱心、熱愛、ねたみ。 jealousy, zealous.
- ②動詞「カーナー」(קָנָה)は35回。ねたむ、熱中する、ねたみを引き起こす。
- ③形容詞「カンナー」(קָנָה)は6回。しつと深い、ねたむ(神)、熱情の神。

●ある神学者は、「アブラハムから派生したユダヤ教、キリスト教、そしてイスラム教の3大唯一神教には教義的にも潜在的な暴力性がみられることは否定できない」として、「われわれは『ねたむ神』から脱し、『愛の神』を至急発見しなければならない。」としています。特に後半にある提言は、「ねたむ神」の概念を人間的な「ねたみ」のイメージで理解しています。そこには「ねたみ」は悪いことだとするイメージがあります。そのために、誤解を回避するために「ねたみ」や「ねたむ」という訳語を神に対して使わない聖書(たとえば「現代訳聖書」)もあるほどです。聖書では、人間の場合の「ねたみ」と神の場合の「ねたみ」は全く質を異にしています。語彙としては同じであっても、その意味するところが全く異なります。人間の場合の「ねたみ」にはやみの力が支配していますが、神の場合の「ねたみ」には光の概念に基づく救済的恩寵の力が支配しています。したがって、聖書のいう神の「ねたみ」の概念とは何かを正しく理解する必要があります。人の「ねたみ」と神の「ねたみ」とはどのように違うのか、また共通するところは何かを探ってみたいと思います。

1. 人の「ねたみ」のイメージ

●「ねたみ」の感情は「いじめ」となって現われます。「いじめ」は今日の日本の社会において大きな問題ともなっていますが、「いじめ」と「ねたみ」は密接な関係をもっており、人間の心の奥深い所に隠れている感情です。聖書ではその感情を悪いこととして書かれています。マルコ7章では「心から出る悪」の中に「ねたみ」が入っています。使徒パウロも「愛は・・・人をねたみません」(1コリント13:4)と記しています。ヤコブも次のように記しています。「もしあなたがたの心の中に、苦いねたみと敵対心があるならば、誇ってははいけません。真理に逆らって偽ることになります。・・・ねたみや敵対心のあるところには、秩序の乱れや、あらゆる邪悪な行いがあるからです。」(ヤコブ3:14,16)。「ねたみ」はあらゆる映画やドラマに用いられる格好の材料です。その材料がなければドラマとしての盛り上がりには欠けるものとなります。

●聖書で最初に「ねたむ」という語彙が登場するのは創世記26章で、ペリシテ人がイサクを「ねたんだ」とあります(26:14)。その理由は、ペリシテの地をききんが襲ったにもかかわらず、イサクだけが「羊の群れや、牛の群れ、それに多くのしもべたちを持つようになった」からでした。また、種を蒔いて百倍の収穫を得ました。これは神の守りと祝福がイサクにあったことがその理由ですが、このように、「ねたみ」は自分たちが手にできないものを持っている者に対して向けられます。ペリシテ人のイサクに対するねたみは、最初は、井戸をふさぐという形のいじめで現われます。またイサクをペリシテの地から追い出すという形でも現われます。しかしイサクはこのいじめに対して一切争いません。にもかかわらず、祝されているイサクのうちに主がともにいることを見せられたペリシテ人の王アビメレクは恐れを感じ、むしろイサクと平和条約を結ぶこととなります。これは、相手のもっているものが自分と比べて桁違いに多いと(圧倒的な差があると)、「いじめ」がなくなってしまうことを物語っています。

●聖書の中には、さまざまな人が「ねたみ」から殺意へと高じて殺人を犯したり、争ったりしたことが記されています。しかも、その多くが**兄弟姉妹間**に起こっています。その最初の例は、創世記4章にある「カインとアベル」の話です。アベルのささげ物だけに神が目を留め、カインのささげ物には目を留めなかったことで、カインはアベルだけが神に愛されているように思ったのです。ここには「ねたみ」という言葉は出てきませんが、アベルを野原に誘い出し、人類最初の殺人事件を犯してしまったカインの行いは、ねたみから出たものであることは明らかです。聖書全体を見ても分かるように、暗やみの力に翻弄されている「ねたむ人々」、「ねたまれる人々」の話が次々と登場しています。新約聖書においても然り、以下のように、数多くのねたみの話を見ることができます。

A. 旧約聖書

- (1) アブラムの妻サライと彼女の代理として身ごもった女奴隷ハガルとの確執
- (2) 兄エサウの長子の権利を妬んでそれを奪ったヤコブ
- (3) ヤコブの妻となった二人の姉妹、夫の愛をめぐって互いに妬みあうレアとラケル

ヤコブの12人の子どもたちの名前に見る妬みの背景

- ①長男のルベン・・・「主が私の悩みをご覧になった。今こそ夫は私を愛するであろう。」
- ②次男のシメオン・・・「主が私をきらわれているのを聞かれて、この子をも私に授けてくださった。」
- ③三男のレビ・・・「今度こそ、夫は私に結びつくだろう。」
- ④四男のユダ・・・「今度は主をほめたたえよう」
- ⑤五男のダン・・・「神は私をかばってください、私の声を聞き入れて、私に男の子を賜った。」
- ⑥六男のナフタリ・・・「私は姉と死に物狂いの争いをして、ついに勝った。」
- ⑦七男のガド・・・「幸運が来た。」
- ⑧八男のアシエル・・・「なんとしあわせなこと、女たちは私をしあわせ者と呼ぶでしょう。」
- ⑨九男のイッサカル・・・「私が、女奴隷を夫に与えたので、神は私に報酬を下された。」
- ⑩十男のゼブルン・・・「神は私に良い賜物を下された。今度こそ夫は私を尊ぶだろう。」
- ⑪十一男のヨセフ・・・「神は私の汚名を取り去ってください。」「主がもうひとりの子を私に加えてくださるように」
- ⑫十二男のベニヤミン・・・ラケルはこの子を「ベン・オニ」と呼んだ。「私の苦しみの子」「私の悲しみの子」の意味。

●以上のように、「今度こそ」、「今度は」と思いながら、夫の愛を求めているレアの痛ましい姿があります。一方のラケルは、夫に愛されながらも一向に子どもに恵まれないことで、「姉を嫉妬」するようになった(30:1)とあります。

●「嫉妬の炎の嵐によって生まれ出た12人の息子たちはやがてイスラエルの12部族となり、主の救いの歴史の担い手となっていきます。彼らの存在は妬みの結晶と言えなくもありません。家庭内の環境は、決して良いものであったとは考えられません。ちなみに、キリストはヤコブが愛したラケルの子孫からではなく、レアの産んだ子ユダの子孫です。ユダがやがて二人の母の間の子どもたちに和解をもたらす存在になるとはだれにも分かりませんでした。まさに、神のご計画と摂理とは私たちの思いをはるかに超えています。

- (4) 父ヤコブに愛されたヨセフをねたんだ11人の兄弟
- (5) モーセに与えられた特権をねたんでツアラアトにされた姉のミリアム
- (6) アロンとその子らの祭司職をねたんで反乱を試みたコラたち
- (7) 夫エルカナに愛された妻ハンナをねたんだもうひとりの妻ペニンナ

(8) 最初の王サウルのねたみのゆえに、荒野放浪で訓練されたダビデ

B. 新約聖書

- (1) イエシュアを「ねたんだ」祭司長、および民の長老たち。ローマ総督ピラトは、祭司長、長老たちがねたみからイエシュアを引き渡したことに気づいていた（マタイ 27:18、マルコ 15:10）。
- (2) 初代教会の弟子たち、および使徒パウロの働きに対して、ねたみかられたユダヤ人が彼らの働きを妨害しようとした。
- (3) 教会の中にはねたみや争いをもってキリストを宣べ伝える者もいた(ピリピ 1:15)。

●救いが異邦人におよんだことについて、使徒パウロは神が「イスラエルにねたみを起こさせるため」だとしています(ローマ 11:11)。パウロも何とか同国人にねたみを引き起こさせて、その中の幾人でも救おうと願っていると述べていますが、その「ねたみ」は人間的な意味での「ねたみ」です。パウロは旧約を熟知している人です。その彼が異邦人に福音を先に述べ伝えることでユダヤ人にねたみを起こさせると考えたのは、そのねたみが神の導きの方法の一つだと確信していたようです。

2. 神の「ねたみ」のイメージ

●神の「ねたみ」のイメージは、人の「ねたみ」のイメージと全く異なります。神の「ねたみ」はご自分の民に対する熱愛のもう一つの面であることを知らなければなりません。つまり、熱愛とねたみは表裏一体的関係概念です。原語は同じ「エール・キヌアー」であったとしても、訳語として「ねたむ神」と「熱情の神」という二つの面があるのです。これが原語の動詞「カーナー」(קָנַן)のうちに含まれている意味です。

(1) 神の自己宣言としての「カンナー」

●出エジプト記 20 章 5 節には「あなたの神、主であるわたしは、**ねたむ神**」(新改訳)と神が自己宣言しています。新共同訳はそこを「わたしは主、あなたの神。**わたしは熱情の神である。**」、バレルバロ訳は「**私は、ねたみ深い神である**」と訳しています。この箇所では形容詞の「カンナー」(קָנַן)が使われており、「わたしは熱情の神(ねたむ神)」のヘブル語は、「アーノーヒー・エール・カンナー」(אֲנֹכִי אֵל קָנַן)と表記されます。

(2) 「エール・カンナー」は、夫婦における関係概念

●「ねたみ」が人に使われる場合には、兄弟関係、あるいは同じ立場(妻、王、部族など)にある者の間に起こってくる心情であったのに対し、神の「ねたみ」はご自身の民に向けられた神の心情(熱愛)、あるいは、妻に対する夫の心情(熱愛)に基づいて起こってくるものです。この点が重要です。神の民であるイスラエルは、主なる神にとっては夫と妻の関係です。

●民数記 5 章 11～31 節に、「妻に対する嫉妬に関する規定」「夫が妻に対して抱いた妬みについての規定」が記されています。その反対ではないことが重要です。なにゆえに、このような規定が聖書に記されているのでしょうか。

【新改訳改訂第3版】民数記 5 章 11～31 節

- 11 ついで【主】はモーセに告げて仰せられた。
- 12 「イスラエル人に告げて言え。もし人の妻が道はずして夫に対して不信の罪を犯し、
- 13 男が彼女と寝て交わった(※1)が、そのことが彼女の夫の目に隠れており、彼女は身を汚したが、発見されず、それに対する証人もなく、またその場で彼女が捕らえられもしなかった場合、
- 14 妻が身を汚して、夫にねたみの心が起こって妻をねたむか、あるいは妻が身を汚していないのに、夫にねたみの心が起こって妻をねたむかする場合、(※2)
- 15 夫は妻を祭司の所に連れて行き、彼女のためにオオムギの粉十分の一エバをささげ物として携えて行きなさい。この上に油をそいでも乳香を加えてもいけない。これはねたみのささげ物(「ミンハット・ケナーオート」
מִן־הַחֹטֵאֵת הַקְּנָאִוֹת)、咎を思い出す覚えの穀物のささげ物だからである。
- 16 祭司は、その女を近寄せ、【主】の前に立たせる。
- 17 祭司はきよい水を土の器に取り、幕屋の床にあるちりを取ってその水に入れる。
- 18 祭司は、【主】の前に女を立たせて、その女の髪の毛を乱れさせ、その手にねたみのささげ物である覚えの穀物のささげ物を与える。祭司の手にはのろいをもたらす苦い水がなければならぬ。
- 19 祭司は女に誓わせ、これに言う。『もしも、他の男があなたと寝たことがなく、またあなたが夫のもとにありながら道ならぬことをして汚れたことがなければ、あなたはこののろいをもたらす苦い水の害を受けないように。
- 20 しかしあなたが、もし夫のもとにありながら道ならぬことを行って身を汚し、夫以外の男があなたと寝たのであれば、』
- 21 ——そこで祭司はその女にのろいの誓いを誓わせ、これに言う——『【主】があなたのももをやせ衰えさせ(※3)、あなたの腹をふくれさせ(同※3)、あなたの民のうちにあつて【主】があなたをのろいとし誓いとされるように。
- 22 またこののろいをもたらす水があなたのからだに入って腹をふくれさせ、ももをやせ衰えさせるように。』その女は、『アーメン、アーメン』と言う。
- 23 祭司はこののろいを書き物に書き、それを苦い水の中に洗い落とす。
- 24 こののろいをもたらす苦い水をその女に飲ませると、のろいをもたらす水が彼女の中に入って苦くなるであろう。
- 25 祭司は女の手からねたみのささげ物を取り、この穀物のささげ物を【主】に向かって揺り動かし、それを祭壇にささげる。
- 26 祭司は、その穀物のささげ物から記念の部分をひとつかみ取って、それを祭壇で焼いて煙とする。その後、女にその水を飲ませなければならない。
- 27 その水を飲ませたときに、もし、その女が夫に対して不信の罪を犯して身を汚していれば、のろいをもたらす水はその女の中に入って苦くなり、その腹はふくれ、そのももはやせ衰える。その女は、その民の間でのろいとなる。
- 28 しかし、もし女が身を汚しておらず、きよければ、害を受けず、子を宿すようになる。
- 29 これがねたみの場合のおしえである。女が夫のもとにありながら道ならぬことをして身を汚したり、
- 30 または人にねたみの心が起こって、自分の妻をねたむ場合には、その妻を【主】の前に立たせる。そして祭司は女にこのおしえをすべて適用する。
- 31 夫には咎がなく、その妻がその咎を負うのである。』

※1

「交わった」－「性的関係をもった」ことを意味し、原文では名詞「横たわる、漏出」(「シエハーヴァー」**שָׁכַבָה**)と「種、精液」を意味する名詞「ゼラ」の熟語「シフヴァット・ゼラ」(**שִׁפְוֹטֵי זֵרָה**)は婉曲表現で、「膣内射精」を意味します。

※2

「ねたみの心」(=ねたみの霊「ルーアツハ・キヌアー」**רוּחַ קִנְיָהּ**)。この「霊」を意味する「ルーアツハ」(**רוּחַ**)には暴風並みの「激しさ」を感じさせます。

※3

「ももをやせ衰えさせ」・「もも」(新共同訳は「腰」と訳す)は「性器の婉曲表現」で、「やせ衰えさせる」とは死産、もしくは流産を意味します。「腹」が「子宮、胎内」の婉曲的表現とすれば、「腹をふくれさせ」とは「流産・早産」を意味します。「もも」は「ヤーレーフ」(**יָרֵךְ**)、「腹」は「ベテン」(**בֶּטֶן**)。

●この箇所(11～31 節)は、姦通の事実が証明できない場合、有罪か無罪かを決定する鑑定法の一例として記されているところですが、疑問に思うのは、なぜ夫のねたみだけが取り上げられているのでしょうか。一見、公平ではないように思いがちです。しかしこれには根拠があります。聖書では、「姦淫罪」や「ねたみ」の対象は妻に対して適用されています。その背景には、神と神の民の関係、夫と妻の関係がその根底にあるからだと考えられます。ホセア書のメッセージも夫のホセアと妻ゴメルの関係において、妻ゴメルが姦淫を犯したことが背景となっています。ゴメルに対するホセアの関係が神とイスラエルの型となっています。

●もし夫が、他の男性と自分の妻が怪しい関係だということを知ったり、感じたりするとき、夫にねたむ権利があるのでしょうか、ないのでしょうか。民数記 5 章が言わんとしているのは、夫だけがねたむ権利があり、それは罪ではないということが前提となっています。むしろ、ねたむことが正当なのです。神の場合も同様です。とりわけ神に属する関係(結婚関係)となった相手に対して、ねたむことは良いことであり、正当なのだということです。

●ヤコブの手紙 4 章 5 節に、「神は、私たちのうちに住ませた御霊を、ねたむほどに慕っておられる(=深く愛しておられる)」とあります。「神が私たちのうちに住ませた聖霊は、ねたむほどに(私たちを)慕い求めておられる」という別訳もあるようです。私としては後者の方がピンと来ますが、いずれにしても、ここは、主とのかわりを持っているにもかかわらず、神の敵である世を愛するという、まさに貞操のない者たちに対して語られているところです。聖霊が「ねたむ」のは当然のことではないでしょうか。神のねたみはそれほど深く相手愛しているということです。

●神が、人から取ったあばら骨で女を造られ、その女を人のところに連れて来られた時、人は言いました。「これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉。これを女と名づけよう。これは男から取られたのだから。」と。男はヘブル語で「イーシュ」(**אִישׁ**)。女はヘブル語で「イッシャー」(**אִשָּׁה**)です。男と女を表わすヘブル語の中に、実は結婚の奥義が隠されています。まず、相手にあって自分にはない文字といえば、女の場合は「ヨッド」(**י**)で、男の場合は「ヘー」(**ה**)という文字です。この二つの文字が一つに組み合わせ

れると、「ヤー」(יה)という文字になります。この「ヤー」(יה)は、神聖四文字のיהוהの短縮形で固有名詞です。男(איש)と女(אשה)が一体となることによって、そこに「主」(יה)がおられます。と同時に、もう一つの単語(実際は同じ単語が二つ)が見出されます。それは「エーシュ」(אש)で、「火・炎」を意味します。この火とは一体である夫婦の中におられる「主の火」であり、それは妻に対する「熱愛の火」であると同時に、「ねたみの火」を合わせ持っています。一体となるべき夫婦の中に隠されたこの「主の火」こそ、神がご自身のご計画を実現させるべく救済の歴史を導いていくモチベーションとなっているのです。使徒パウロが、夫と妻とが結ばれて一体となる「結婚の奥義は偉大です」(エペソ 5:31~32)と記したのはそのためであると信じます。結婚という目に見える「型」の中に、永遠の神のご計画とみこころと御旨と目的が、奥義として隠されているのです。そのことにパウロは目が開かれたのです。



(3) 神のご計画を実現(成就)させるモチベーションとしての「キヌアー」

●このことを考察する上で、イザヤ書における有名なメシア預言の箇所である9章1~7節を取り上げます。この箇所は、メシア王国の預言とそれを実現に至らせる万軍の主の「熱心」について啓示している数少ない箇所です。特に、「万軍の主の熱心」というフレーズは旧約の中で2回しかありません。イザヤ書9章7節とイザヤ書37章32節(並行記事としてⅡ列王記19章31節)です。前者はエフライム(北イスラエル)に対する預言の中に、後者はユダ(南ユダ)に対する預言の中にあります。両者合わせて「全イスラエル」に対する預言としてこのフレーズが語られていることとなります。

【新改訳改訂第3版】イザヤ書9章1~7節(新共同訳では1節が8章最後の節となっています)

- 1 しかし、苦しみのあった所に、やみがなくなる。先にはゼブルンの地とナフタリの地は、はずかしめを受けたが、後には海沿いの道、ヨルダン川のかなた、異邦人のガリラヤ(※1)は光栄を受けた。
- 2 やみの中を歩んでいた民は、大きな光を見た。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が照った。(※2)
- 3 あなたはその国民をふやし、その喜びを増し加えられた。彼らは(※3)刈り入れ時に喜ぶように、分捕り物を分けるときに楽しむように、あなたの御前で喜んだ。
- 4 あなたが彼の重荷のくびきと、肩のむち、彼をしいたげる者の杖を(※4)、ミデヤンの日になされたように(※5)粉々に砕かれたからだ。
- 5 戦場ではいたすすべてのくつ、血にまみれた着物は、焼かれて、火のえじきとなる。(※6)
- 6 ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。(※7)
- 7 その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。今より、とこしえまで。万軍の【主】の熱心がこれを成し遂げる。(※8)

※1

●なにゆえに、異邦人のガリラヤは光栄を受けたのでしょうか。ここには神のご計画における明確な理由があります(これについては、キム・ウヒョン監督「主の道を辿って」179頁以降を参照)。簡潔に言うならば、「イスラエル(=エフライム)の回復」のためです。

●1節には、同義的パラレリズム、反意的パラレリズムが見られます。同義的パラレリズムとしては、「苦しみがあった所」と「ゼブルンの地とナフタリの地」とは同義です。しかもそれは「異邦人のガリラヤ」と言い換えられます。「やみ」と「はずかしめ」も同義です。反意的パラレリズムは、「先には・・・はずかしめを受けたが、後には・・・光栄を受けた」という部分です。「はずかしめを受けた」のは、アッシリアの王ティグラテ・ピレセルの侵入によって民族の雑婚がなされたからです(Ⅱ列王記 15:29を参照)。イザヤがなぜ「異邦人のガリラヤ」という表現をしたのかと言えば、その地に住んでいたイスラエルの民と移住してきた異邦人とが雑婚したことで、民族としての純粋さが失われたからです。そして後の時代に、ユダヤ人(ユダの人々)たちがガリラヤ地方に住むイスラエル人を異邦人のごとく軽蔑するようになるという意味なのです。しかし、イエシュアが宣教を開始された場所はこのガリラヤでした。しかも弟子たちをこの地域から選んでいます(イスカリオテのユダ以外はみな)。イエシュアは「わたしはイスラエルの家の滅びた羊以外のところには遣わされていません。」と言われました。イエシュアはこの地に対して、エルサレムの指導者たちがしたように、「異邦人のガリラヤ」という扱いをされませんでした。

●いずれにしても、イエシュアの宣教によって「異邦人のガリラヤが光栄(あるいは「栄光」)を受けた」、ことは事実です。そのときの喜びが2~4節に記されています。ここでの「光栄」の原語は動詞「カーヴアド」(קָבַד)の使役形「ヒフビード」(הִכְבִּיד)で、「重くする、栄光に満たす」という意味です。しかもここは預言的完了形で書かれており、未来において確実に起こることが強調されています。ただし現在、まだ完全には実現されていません。これからのことです。それがだれによって実現されるのか、それが6~7節に記されている内容です。

※2

●2節の「やみ」と「光」は神の救済の歴史においてきわめて重要な、対極的な位置にある概念です。2節前半の「やみの中を歩んでいた民は、大きな光を見た」と後半の「死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が照った」は同義的パラレリズムです。この節の動詞「見た」「照った」も預言的完了形です。すでにその一部がイエシュアの初臨で実現しているのを私たちは知っています。ですから「すでに・・・今だ」なのです。

※3

●「彼ら」とは、イスラエルの「残りの者」。ここでは特に「エフライム」、すなわち、失われたイスラエルの10部族を指しています。その彼らが、神によって再び主の前に集められて、「刈り入れ時に喜ぶように」「分捕り物を分けるときに楽しむように」なるのです。このことをまともに信じているクリスチャンはどれほどいるのでしょうか。「収穫祭」「戦いの勝利後の戦利品の分配」は大きな歓びの時であり、メシア王国挙げての喜びの訪れとなるのです。メシア王国の基調は、ダビデの幕屋礼拝が示唆しているように、「爆発的な喜び」です。

※4

●「くびき、むち、杖」は直接的にはアッシリヤを指していますが、それは「型」であって、本体は反キリストの勢力を示唆しています。

※5

●「ミデヤンの日」とは実際に起こった記念碑的な神の勝利に基づくたとえです。兵力や装備といった人間的な手段ではなく、神の驚くべき力による勝利であったことから、反キリストの率いる勢力がことごとく打ち砕かれることを示唆しています。

※6

●最後の敵(反キリスト)の軍勢が打ち砕かれることによって、戦いの道具(くつ、着物)が火で焼かれて全廃させられます。そのことによって、完全な平和(「シャーローム」 שָׁלוֹם)が訪れることを意味します。

※7

●王なるメシアが「生まれる」「与えられる」「あり」「呼ばれる」はすべて預言的完了形。「生まれる」「与えられる」は、すでにイエシュアの初臨によって実現しています。「主権」と訳された「ミスラー」(מְשֻׁלָּה)は、旧約聖書ではここ6節と7節のわずか2回しか使われていませんが重要な語彙です。「主権」とは権威のしるしである王衣を肩にまとうことを意味します。王としてのメシアは再臨されてはじめて目に見える形でその主権を現わされます。そしてこのメシアがおられるエルサレムに、世界中から人々がメシアの教えを聞くために流れて来ます(イザヤ 2:2~3)。かつてモーセの幕屋に主が臨在していることを示す雲の柱、火の柱があったように、メシアが統治されるエルサレムにもシャハイナ・グローリーが絶えず輝いているために、そこは「昼も夜もない、夕暮れ時に、光がある」(ゼカリヤ 14:7)所となります。想像できるでしょうか。

※8

●メシアの支配における王国の進展・強化が預言されています。メシア王国の平和は拡大し、促進され、果てしなく続いていきます。メシア王国における平和は無限です。ダビデの王座に着くということは神の民を支配することを意味します。民のいない王国は成立しません。王なるメシアの統治は公正と正義であり、その土台はゆるぎない「新しい契約」という基礎の上に置かれています。

●「今より、とこしえまで」とは、やみの中、死の陰の地にメシアが現われた初臨の時からすでに始まっていると理解しても良いでしょう。しかし真の栄光の光(シャハイナ・グローリー)はメシアの地上再臨によって実現します。

●「熱心」とは「ねたみ」と同義。情熱、熱愛、熱意を意味し、人間的なねたみの意味ではなく、神のご計画、みこころ、御旨、目的を確実に達成しようとする切なる願い(熱情)を意味しています。十戒の中に「あなたの神、主は焼き尽くす火、ねたむ神だからである。」(申命記 4:24)とあります。新共同訳は「ねたむ神」を「熱情の神」と訳しています。そうした「ねたむ神」と「熱情の神」のイメージを合わせ持ったヘブル語が「エール・カンナー」(אֵל קָנָן)です。形容詞の「カンナー」(קָנָן)には「きらめく火」「きらめく炎」のイメージがあります。そのイメージの一面は「愛の火のきらめき」であり、もう一面は「怒りの火のきらめき」です。そのきらめきは「激しさ」を伴います。愛する対象が何ものかによって傷つけられたり、また愛そのものが損なわれたりするときに現わされる主の激しい心情(情動)、それが「エール・カンナー」です。

●これは愛の一体性に基づく心情です。主とイスラエルは合意に基づく結婚をした夫婦関係です。それゆえ神はイスラエルを愛されるのですが、妻であるイスラエルが神以外に心を向けるとき、さばきの炎として現われて彼らを取り戻そうとされるのです。そのことがメシアによって確実に実現します。

●7節は、旧約聖書全体の中でも、メシア預言としては最も明確な、かつ最も意味深いものです。そしてそれを実現させようとする神のモチベーションが啓示されている箇所と言えます。つまり、神がねたむほどの激しい熱意をもって、ご自身のご計画とみこころを成し遂げるのです。イザヤは、そのことを「万軍の【主】の「熱心」(「キヌアー」**קִנְיָהּ**)」という一語で語った預言者と言えます。人間的な視点では想像しえない将来の出来事ですが、私たちは御父の心を知って、それを信仰によって受け入れ、その実現に心を燃やしつつ待ち望む者とならなければなりません。なぜなら、この信仰こそ、私たちを救う力だからです。

ベ・アハリート

●毎年訪れるクリスマスにおいて、このイザヤ書9章1～7節が教会で開かれ、読まれ、そして語られることが多いはずですが、しかし果たして、この箇所が預言している内容を正しく理解し、私たちに約束されている希望を新たにしている機会となっているのでしょうか。しばしば、イザヤ書9章7節にある「万軍の主の熱心がこれを成し遂げる」という部分だけが取り出されて、伝道集会やリバイバル集会などのキャッチ・フレーズとして用いられ、自分たちがしようとしている集会は「万軍の主の熱心がこれを成功させてくださる」「成し遂げてくださる」という意味で用いられたりします。実は、私もそうしていた一人でした。「万軍の主の熱心がこれを成し遂げる」の「これ」に対する理解が全く的外れであったわけです。「的外れ」は罪です。このような間違いを犯すことによって、預言のことばの真意が損なわれてしまっていたことを反省する者です。こうした過ちを続けている限り、イエシュアの語られた「御国の福音」を正しく理解することは困難です。このみことば(イザヤ9:1～7)は、人間の理解や想像をはるかに越えた神の壮大な救いのご計画と、それを確実に実現しようとする神の深淵なモチベーションが語られているのです。そのモチベーションの真意は、言葉では言い表し切れない、神の激しさを伴った神の「ねたみ」と神の「熱意・熱心・熱情」を合わせ持った「エール・カンナー」(**אֵל קָנָא**)という言葉の中に秘められています。このことに目が開かれていくことが、聖書を読む目的であり、みことばを瞑想する目的なのだと言えます。ヘブル・ミドゥラーシュもそうした取り組みの一つでありたいと思います。

●最後に、今回のタイトルを『「エール・カンナー」(**אֵל קָנָא**)のイメージとダイナミズム』としましたが、神の「ねたみ」のイメージについてはある程度説明できたように思います。しかしそのダイナミズムについては、聖書全体におよぶため、それについての説明は不十分です。したがって、副題の「神のねたみに基礎づけられた熱愛」についても然りです。もし、「エール・カンナー」のダイナミズムに心の目が開かれ、それを悟ることができるならば、「心燃える経験」となることは間違いありません。この点については、私のこれからの課題としたいと思います。

Hebrew Midrash No.9

2016.6.16(木) 銘形 秀則